



救済委員からのメッセージ



相談者のお母さんの一言をここに刻んで

札幌市代表子どもの権利救済委員 原 敦子

1 はじめに

平成 30 年 4 月に子どもの権利救済機関の子どもの権利救済委員に就任してから、今年で 5 年目になります。

毎日、寄せられる相談は、「物を無くしてしまったのだけれど、どうしたらいいの」などの相談から、「生きている意味がわからない。死にたい」などの相談まで、多岐にわたります。最近では、障がいを抱えた子どもやその保護者からの相談も寄せられています。

そんな障がいを抱えた子どもに関する相談を寄せたお母さんからの言葉を、今年度、ここに刻みながら、新たな取り組みが実を結ぶことができた件を、一言いただいたお母さんへの報告もかねて以下にご紹介したいと思います。

2 相談者のお母さんからの一言

令和 3 年度に障がいを抱えた子どものお母さんから通所している施設において異性の子どもから「いやがらせ」を受けているとの相談が寄せられました。その「いやがらせ」は、数年間にわたり行われ、通所している施設側、保護者すらも気づかない状態でした。また、その被害を受けた子ども本人も、その時には何が起きたのかもわからず、ましてや性的いやがらせをされることが、「子どもの権利」侵害にあたることなども知らず、どこかに相談してみようなどとの考えも浮かばない状態でした。その相談自体は、加害者の子どもから謝罪があり、通所施設側が死角となる場所へのカメラ設置など環境改善を図ったことから、アシストセンター（以下「アシスト」という。）とそのお母さんの関わりは終了しましたが、お母さんから最後に一言、「これからこのようなことがないようにお願いします。」と言われたことがここに残り、救済機関としての役割が行き及んでい

ないことを痛感させられました。

3 新たな一步を踏み出す

お母さんの言葉を胸に刻み、アシストとして障がいを抱えた子どもの権利救済のために何ができるのか、当センター内で議論・協議をしながら、その第一歩として、取り組んだのが、障がいを抱えた子どもが利用する施設を所管する札幌市保健福祉局障がい保健福祉部（以下「福祉部」という。）との連携・協力関係を構築していくことでした。

そこで、令和4年9月に福祉部と将来に向けて、障がいを抱えた子どもの「子どもの権利」救済のためにタッグを組むべく、「懇談会」を開催しました。その会では、福祉部の職員の方から障がい児施設の現状などを聞き、多くのことを学ぶ機会となったところですが、アシストとしては将来の子どもの権利救済環境を整えるべく、3つの連携協力を要望したところです。

4 福祉部への将来に向けた要望

1つ目は、障がいを抱えた子どもが通う施設の職員が「子どもの権利」に関する見識を深めると同時に、権利救済のためのアシストの存在なり、役割なり、利用喚起なりを行う必要があるという点

2つ目は、障がいを抱えた子どもも「子どもの権利」に守られており、それが侵害されることがあれば、相談先として「アシスト」があることを知ってもらう必要があるという点

3つ目は、障がいを抱えた子どもやその保護者から相談があった際には、福祉部の協力が必要不可欠であるという点

以上、3つの要望を、この懇談会で福祉部と話し合うことができました。

5 3つの要望の実現

この3点の要望は、①令和4年度の障がい児施設職員の研修の機会として行われる集団指導カリキュラムの一つに「子どもの権利及びアシスト」の項目を追加してもらうことができたこと、②アシストの電話番号などが表記された周知用シールや相談カードを来年度早々、障がい児施設に配布する予定であることにより、着実に実現しており、懇談会を契機に障がいを抱えた子どもの権利救済の取り組みが着実に実現していることは大変にうれしく、将来に向けて、アシストとして

大きな成果になるものと期待しております。

6 最後に

来年度も引き続き障がいを抱えた子どもへの「子どもの権利」救済の充実を図るべく注力していくとともに、今後は、寄せられる相談によっては福祉部の力を借りながら、適切に子どもの権利救済に努めてまいりたいと考えております。

最後に、福祉部の方には、業務でお忙しいところ、アシストとの懇談会にご参加いただきましたこと、及び当センターの要望の実現にご協力いただきましたこと、誠に感謝申し上げます。

一言をいただきました相談者のお母さんには、着実に一步一步、障がいを抱えた子どもの権利救済に向けた取り組みが進んでいることをこの場を借りて、ご報告させていただくとともに、今後もお母さんからいただいた言葉を胸に刻みながら、子どもの権利救済を行ってまいりたいと考えております。

来年度が救済委員としての最後の年となります。微力ながら救済委員の職務に尽力し、子どもの権利救済のための一助となれば幸いです。